

## 要 旨

---

ヨーロッパの東端に位置するルーマニアは、面積 237,500 平方km、人口約 2,190 万人の小国である。地理的に東はドイツ、西はロシアに挟まれ、その歴史を見ても常に大国の影響を受け、翻弄され続けてきた。「ルーマニア」という名前を聞いて、私たち日本人にとって最も身近なのは、1989 年 12 月の「ルーマニア革命」である。1965 年から続いたチャウシェスク独裁政権が、この年、民衆の手によってチャウシェスクの処刑という形で崩壊した。革命以降、1990 年代にはルーマニアは経済の停滞期を迎えるが、その後回復し、現在は 2007 年の EU 加盟を目前にして、より一層の経済発展が期待されている。

しかし、「市民に自由を与えた革命」から 15 年経た今、この国には未だ自由を手に入れることなく、その可能性を大きく奪われている人々がいる。ルーマニア人口の約 10 パーセントを占めるロマ民族である。なぜ、彼らは自由を手に入れることができないのか？それは、彼らに対する差別・偏見が現在も確実に存在しているからである。歴史的にロマ民族は、ルーマニア社会の周辺部で生活を余儀なくされ、常に不安定な雇用・教育・住宅環境の中にいた。その状況は、現在もさほど変わっていない。ルーマニア人は、彼らを「社会の病巣」とし、治安の悪化などの社会不安などの原因としているのである。

2000 年に入ってから、首都ブカレストの路上生活者は一掃された。その大部分が、ロマの人々である。経済発展の影で、社会から抹殺されようとされている彼らにとっては、チャウシェスク独裁の共産主義時代も経済移行後の社会も何ら変わらずルーマニア社会の隅に追いやられているだけなのである。

本論文で、私は常にルーマニア社会の隅に追いやられ続けてきたロマ民族を扱う。第一章では、現在のルーマニアと他の東ヨーロッパ諸国におけるロマ民族の人口分布を分析し、ルーマニアにおけるロマ民族の歴史を振り返る。第二章では、ロマ民族とルーマニア人の歴史から生まれた彼らへの差別・偏見を文化的相違から生じる構造として分析する。そして第三章では、ロマ民族の教育・雇用・居住環境といった社会、経済的な問題とそれに対する取り組みを隣国ハンガリーを例として紹介し、第四章に EU 東方拡大にともなって、ロマ民族にとってより良い社会を作っていくためにルーマニア社会が改善すべき様々な問題を見ていきたい。

この論文の問いの根源にあるのは、ロマ民族に対する歴史的偏見・差別が引き起こしている経済的・社会的格差、貧困といった問題が社会主義体制崩壊後のルーマニアないし他の東欧諸国でいかに取り組まれているか、また EU 統合にともない国を持たざるロマ民族が直面する問題を考えていくところにある。

【参考文献】

鎌田慧,(2003) 『ルーマニア・マンホール生活者たちの記録』現代書館

David M. Crowe (1996),水谷毅訳 『ジプシーの歴史 東欧・ロシアのロマ民族』 共同通信社

Angus Fraser,水谷毅訳 (2002) 『ジプシー 民族の歴史と文化』 平凡社

加賀美雅弘 (2004)、『「ジプシー」と呼ばれた人々～東ヨーロッパ・ロマ民族の過去と現在～』 学分社

Ian Hancock, 水谷暁訳 (2005) 『ジプシー差別の歴史と構造～パーリア・シンドローム～』 彩流社

IMADR ロマプロジェクトチーム 『「ロマ」を知ってますか 「ロマ/ジプシー」苦難の歩みをこえて』 IMADR-C

吉井昌彦,(2000) 『ルーマニアの市場経済移行～失われた90年代? -』 勁草書房

藤井良弘,(2005) 『EUの知識<第14版>』日経文庫

浅井順子,(1993) 『ルーマニア エイズと闘う子供たち』 凱風社